

金色こんじきの処女おとめ

野村胡堂

本篇は錢形平次の最初の手柄話で、この事件で平次は有名になったのです。この頃の平次は独身でしたからお静はまだ女房になっていず、八五郎も現われてはおりません。

—

「平次、折入っての頼みだ。引き受けてくれるか」

「へエ——」

錢形の平次は、相手の真意を測り兼ねて、そつと顔を上げました。二十四、五の苦み走った好い男、藍微塵あいまじんの狭い袷あわせに膝小僧を押し隠して、弥造やぞうに馴れた手をソツと前に揃えます。

「一つ間違えば、御奉行朝倉石見守様あさくらいのみのかみは申すに及ばず、御老中方に取っても腹切り道具はらぎだ。押し付けがましいが平次、命を投げ出すつもりでやって見てはくれまいか」

と言うのは、南町奉行与力の筆頭笹野新三郎ささの、奉行朝倉石見守の知恵囊ちえぶくろと言われた程の人物ですが、不思議に高貴な人品骨柄こつこうです。

「頼むも頼まないも御座いませぬ。先代から御恩になった旦那様の大事とあれば、平次の命なんざ物の数でも御座いませぬ。どうぞ御遠慮なく仰しゃって下さいまし」

敷居の中へいざり入る平次、それをさし招くように座布団を滑り落ちた新三郎は、

「上様うえさまには、又また雑司ぞうしガ谷やの御鷹狩たかがりを仰せ出された」

「エッ」

「先頃、雑司ガ谷御鷹狩の節の騒ぎは、お前も聞いたであろう」
「薄々は存じております」

それは平次も聴き知っておりまして。三代將軍家光公が、雑司ガ谷鬼子母神きしもじんのあたりで御鷹を放たれた時、何処からともなく飛んで来た一本の征矢そやが、危うく家光公の肩先をかすめ、三つ葉葵あおいの定紋を打った陣笠の裏金に滑って、眼前三步のところに落ちたという話。

それッ——と立ちどころに手配しましたが、曲者の行方ゆくえは更にわかりません。

後で調べて見ると、鷹の羽を矧はいだ篋深のぶかの真矢ほんやで、白磨き二寸あまりの矢尻やじりには、松前のアイヌが使うと言う『トリカブト』の毒が塗ってあったと言うことです。

「その曲者も召捕らぬうちに、上様には再度雑司ガ谷の御鷹野を仰せ出された。御老中は申すに及ばず、お側の衆からもいろいろ諫言かんげんを申し上げたが、上様日頃の御気性で、一旦仰せ出された上は金輪際こんりんざい変替は遊ばされぬ。そこで御老中方から、朝倉石見守様へ直々のお頼みで、是が非でも御鷹野の当日までに、上様を遠矢にかけた曲者を探し出せとのお言葉だ。何とか良い工夫はあるまいか」

一代の才子笹野新三郎も、思案に余って岡っ引風情の平次にすが縋り付いたのです。

「よく仰しやって下さいました。御用聞冥利みょうり、この平次が手一杯にお引き受け申しましょう。ついては旦那、私が聞きたいと思う

ことを、皆んな隠さずに仰しゃって頂けましようか」

「それは言う迄もない事だ。何んなりと腑ふに落ちない事があつたら訊くが宜い」

「ではお尋ねしますが、上様を雑司ガ谷のお鷹野に引き付けるのは、何にか深い仔細しさいが御座いませう。小鳥のいるのは雑司ガ谷ばかりじゃ御座いませぬ。目黒にも桐ガ谷にも千住にも、この秋はことの外えもの獲物が多いという評判で御座います。それがどうしたわけで——」

「これこれ、段々声が高くなるではないか」

「へエ——、でもこれが判らなかつた日には手の付けようが御座いませぬ」

「話すよ——、薄々世間でも知っていることだ——、雑司ガ谷の鷹野の帰り、上様うえさまには決つて、大塚御薬園へ御立寄りになる。あの中に新築した高田御殿で、一とわん腕の御薬湯を召上がるのが、きつとお楽しみだ」

「と申すと」

「世上の噂でも聞いたであろう。御薬園預りの本草家ほんぞうか、峠宗寿軒とうげそうじゆけんの娘お小夜は、府内にも並ぶ者なしという美人だ」

「それで御座いますつてね、上様もまったくお安くねえ」

「コレコレ、何を申す」

「へエ——、だが、有難う御座いました。それだけ伺えば大方筋はわかります。仔細あつて私もお小夜の顔ぐらゐは存じておりますが、あの女はどうしてどうして一筋縄でいける雌めすじゃ御座いませぬ——、宜しゅう御座います。乗るかそ反るか、平次の出世試し、命にかけてもやつて見ましよう」

平次の若々しい顔には感興インスピレーションにも似たものがサツと匂って、身分柄へだたの隔りも忘れたように、胸をトンと叩いて見せました。

「お鷹狩の日取りは明後日だ。ぬかりはあるまいが、そのつもりで——。拙者には拙者の工夫がある。油断をすると、手柄くら比べになろうも知れぬぞ」

「へえ——」

二人は顔を見合せて、会心の微笑を交かわしました。与力と岡っ引では、身分は霄壤てんちの違いですが、何にかしらこの二人には一脈相通ずる名人魂があつたのです。

二

大塚御薬園、一名高田御薬園というのは、今の音羽の護国寺の境内にあつたもので、一万八千坪の中に有名な薬師堂、神農堂しんのうどうをはじめ、將軍臨場りんじょうの時の為に、高田御殿という壮麗なる御殿まで出来ていました。

総檜そうひのきの破風造り、青銅瓦せいどうがわらの錆も物々しく、数百千種の薬草靈草から発する香氣は、馥郁ふいくとして音羽十町四方に匂つたと言われるくらい。幕府の御薬園の権威は大したもので、もとより岡っ引や御用聞などの近付ける場所ではありません。

与力笹野新三郎の屋敷を飛び出した銭形平次、いきなり大塚へ飛んで来て、この薬臭い扉にへバリ付きましたが、場所が場所だけに、どう工面しても入り込む工夫が付かないのです。

丸半日、氣のきかない空巢狙あきすねらいのような事をしていた平次も、その日の昼頃には、到頭シビレをきらしてしまいました。

「チエツ」

舌打ちを一つ、袂たもとから取出したのは、その頃通用した永樂銭が一枚です。手の平へ載せて中指の爪と親指の腹で弾くと、チン——と鳴って、二三尺空中に飛び上がります。落ちて来るところを掌たなごころで受けると、これがその儘銭占ぜにうらない。

「帰れって言うのか、よし」

銭を袂に落すと、その儘塀を離れて、音羽の通りへ真っ直ぐに踏出しました。これが銭形平次という綽名あだなの出たわけの一つ。もう一つ、平次には不思議な手練があつて、むずかしい捕物でつくわに出会すと、二三間飛退つて、腹巻から鍋銭なべせんを取り出し、それを曲者の面体目がけてパツと抛り付けます。薄くて、小さくて、しかも一寸重い鍋銭ですから、不用意に投げられると、泥棒や乱暴者などは、キット面体をやられます、ひるむところを付け入つて捕る、このこつはまことに手に入ったもので、銭形の平次というと、年は若いが悪党仲間から鬼神きしんの如く恐れられたものです。

その平次が見限つたのですから、御薬園の塀の中の秘密は容易のことではありません。腹立ち紛れまやの弥造を拵こしらえて、長い音羽の通りを、九丁目まで来ると、ハツと平次の足を止めたものがあります。目白坂の降口に、紺暖簾こんのれんを深々と掛け連ねて、近頃出来ながら、当時江戸中に響いた『唐花屋』という化粧品屋、何の気もなく表へ出した金看板を読むと、一枚は『——おん薬園へちまの水——』次のは『——南蛮秘法なんばんひほう、おん白粉——』そして更にもう一枚には、『——峠流秘薬色々とうげりゅうひやく——』とあります。

「これだッ」

平次は思わず顎を引きました。

「お静坊しずいるか」

「あら親分」

その頃東西の両国に軒を並べた水茶屋の一つを覗のぞいて、平次はこう声を掛けました。

「よう、相変らず美しいネ。罪だぜ、お静坊しず」

「あら親分、そんな事を言うなら、私は嫌」

「どっこい、謝あやまった。逃げちゃいけねえ、今日は大真面目に頼み事があるんだ。静ちゃんしずは、近頃評判の音羽の唐花屋へ買物に行つたことはないか」

「いいえ、朋輩衆ほうばいで唐花屋へ行かない人はない程だけれど、私わたしはまだ行つたことはありません」

「そうだろうねえ、お前ほどの容貌きりようじゃ、へちまの水にも南蛮渡来の白粉にも及ぶめえ」

「あれ、親分さん」

なるほどこれは美しい容貌きりようです。精々十七八、血色あざの鮮やかな瓜実顔に、愛嬌あいぎょうがこぼるるばかり。襟の掛つた木綿物に、赤前垂をこそしめておりますが、商売柄に似ず固いが評判で、枝から取り立ての果物くだもののような清純な感じのする娘でした。

「実は少し無理な頼みだが、半日暇をもらつて、唐花屋まで買物に行つて貰もらいたいんだが、どうだろうネ、静しずい坊」

「え、え、行つて上げるワ」

何と言うわだかまわだかまりのない返事でしょう。

「そいつは有難てえ、それじゃ御意の変らぬうちに——」

岡っ引と水茶屋の娘ですが、どちらも水際立った美男美女で、二人の胸には、何時の間にかやたら淡い恋心が芽ぐんできたのでしよう。兎に角話の運びの早いことは大変です。

両国から小日向まで駕籠、そこからわざと歩いて、唐花屋の入口に着いたのは彼これ西刻近い刻限でした。髪形をすっかり堅気の娘風にしたお静の後姿——黄八丈の袷と緋鹿の子帯が、唐花屋の暖簾をくぐって見えなくなった時は、大日坂の下から遠く様子を見ていた銭形の平次も、さすがに眼の前が真っ暗になるような心持がしました。唐花屋がどうという、突き留めた疑いがあるわけではありませんが職業的第六感とでも言いましょうか、——この儘お静を犠牲にするのではあるまいか——と言った予感が、平次の頭をサツとかすめて去ったのです。

「へちまの水を下さいな」

お静は一向そんな事を構いません。物馴れた調子で日傘を畳みながら、店がまちへもう腰を下ろしております。

「へエ、いらっしやいまし。丁度今年採ったばかりの新しいのが御座います。これ徳どん、そこからお入れ物を持って来てお眼にかけな」

美しい客と見ると、馴れている筈の店中も、なんとなくザワついて、二三人の番頭手代が、磁石に吸付けられる鉄片のように、左右から寄って参ります。

「それからアノ、白粉も貰って行きましよう」

「へエへエ」

「それにお紅も」

大東おおたばな事を言つて、お静はソツと店中に眼を走らせました。近頃出来の店構えで何となく真新しい普請ふしんですが、その癖妙に陰気で妙に手丈夫に出来ているのが、娘の繊弱デリケートな神経を圧迫します。

「お茶を召し上がって下さいまし」

若い丁稚てつちが、店使いにしては贅沢過ぎる赤絵あかえの茶碗ちやわんに、これも店使いらしくない煎茶せんちやをくんで、そつとお静の傍にすすめました。

「有難うよ」

身扮みなりに相応した堅気の娘なら、この茶は飲まなかつたかも知れませんが、お静は水茶屋の女で、お茶を汲くむことも汲ませることも馴れております。桃色珊瑚さんごを並べたような美しい指でそつと受けて、馴れた様子で一口、二た口。

「オヤ——？」

お茶にしては妙に甘い、そして香気が可怪おかしいと思いましたが、三口目には綺麗に飲んでしまいます。

それから口の小さい素焼すやきの徳利とくりへへちまの水を詰めさしたり、白粉と紅とを取揃えたり、お鳥目ちやうもくを出そうとして帯の間へ手をやった時は、先程から我慢していた恐ろしい眠気ねむけが急に襲おそつて来て、性も他愛もなく美しい島田鬻かたむがガツクリ前へ傾きました。

「徳どんは外を見張れ、お前は手を貸せ」

大番頭が立ち上がって指図をすると、馴れた様子で、バタバタと不思議な作業が始まります。

「ヘッ、こいつは全く掘り出し物だ」

「シッ」

二人の若い手代に抱き上げられたお静は、死んだもののようになって、赤い裳もすそと白い脛はぎとが、ダラリと下にこぼれます。

音羽の通りは暫く絶えて、大日坂の下には、宵暗に光る眼、銭形の平次は全く気が氣じゃありません。

四

この時はじめて平次は、近頃江戸中で評判になった美しい娘が、頻繁ひんぱんに行方不明ゆくえになることに思い当りました——芝伊皿子いざらごの荒物屋の娘お夏、下谷竹町の酒屋の妹おえん、麻布笄町あざぶさつがいで御家人の娘お幸こう——、数えて見ると、この秋になってからでも三人ほど姿を隠しております。それも選り抜きの美人ばかり、書置も何んにもないから、まるで神隠しに逢ったようなものですが、それが早くて三日目、遅くとも七日目には、二日目とは見られぬ惨殺さんさつ死体となって、川の中、林の奥、どうかすると往来の真ん中に捨ててあるという始末です。

南北町奉行は、配下の与力同心に命じ、江戸中の御用聞を総動員して、この悪鬼のような犯人を探させましたが、何としてもわかりません。犯人がわからないばかりでなく、何の目的で選り抜きの美しい娘ばかり殺すのか、皆暮れ見当も付かないのです。その上死体は、洗い落してはあるが、歴々ありありと全身に金箔きんぱくを置いた跡あとがあります。

「これだこれだ」

銭形の平次は一人領うなずきながら、宵闇の中をすかして、唐花屋の裏口から出て行く駕籠の後を追いました。その中にお静が入れてあることは最早疑う余地はありません。

駕籠は無提灯むちようちんのまま、音羽の裏通りを真っ直ぐに、今の護国寺、

その頃の大塚御薬園の裏門へ、呑まれるように入ってしまった。
た。

「矢張りそうだ」

平次はこの儘引き返して、笹野新三郎に報告した上、御薬園へ手を入れさせようかと思いましたが、御薬園の見識は大したもので、若年寄直々の指令を受けなければ、町奉行では手の付けようがありません。そんな事で暇取っている内に、お静の命が絶たれては一大事。

「先ずお静を助けよう」

後で考えると、それは多分盲目的になりかけていた、平次の恋心がさせた思案でしょう。前後の考えもなく木蔭の土塀に手が掛かると、平次の身体は軽々と塀を越えて、闇の御薬園の中へポンと飛込んでしまいました。

それから何刻経ったか、どこをどう通ったかわかりません。一万八千坪の御薬園の中、茯苓、肉桂、枳殼、山査子、呉茱萸、川芎、知母、人参、茴香、天門冬、芥子、イモント、フナハラ、ジキタリス——幾百千種とも数知れぬ薬草の繁る中を、八幡知らずにさ迷い歩いた末、僅かの灯を見付けて、真黒な建物の中へスルリと滑り込んでしまいました。

それは多分有名な高田御殿だったでしょう。兎に角、非常に宏壮な建物で、人目を忍ぶにはまことに好都合です。廊下から部屋へ、納戸へ、梯子段へと、人と灯を避けて拾っているうちに、何時の間にやら平次は、天井裏の密閉した一室へ入り込んでおります。

ハッと思つて出口を探しましたが、どんな仕掛があつたか、四

方一様に檜かしの厚板で、戸や窓は愚かなこと、蟻の這い出る隙間もあろうと思えません。

「チエツ、勝手にしやあがれ」

度胸を据えてドツカと坐ると、不思議なことに、床板のあつちこつちから、大きく小さく、下の大広間の灯が漏れております。よく見ると、それは悉ことごとくギヤーマンを張った穴で、この天井裏から、下の様子を覗く為ために出来たのでしよう。——これは後で見ると、悉く下の大広間の格天井ごうてんじょうに描かかれた、天人の眼や、蝶々の羽の紋や、牡丹ぼたんの蓋しべなどであつたと言いうことです。

五

最初平次の眼に入った光景は、広間の中央に祀まつられた、なんとも形容のしようのない醜悪怪奇を極めた魔像まぞうで、その前と両側には、真まつ黒な蠟燭ろうそくが十三本、赤い焰をあげてメラメラと燃えております。

魔像の前には蜥蜴とかげの死骸、猫の脳味噌のうみそ、半殺しの蛇と言いった不気味な供物くもつが、足の高い三方に載せて供えられ、その供物の真ん中に据えた白木の大俎板おまないたの上には、ピチピチした裸体が仰向に寝かされて、その側には磨き立てた出刃庖丁が、刃を下にしてズブリと板の上に突っ立たっています。

「アッ」

さすがの平次も、思わず唇を噛かみました。俎まないたの上の赤ん坊は、泣きも叫びもせず、好い心持そうにニコニコしているのが、四方あたりの陰惨な空気の中に、不思議な対照を描えがき出して、身の毛のよ立

つような気味の悪い情景シーンです。

突然、今迄聞いた事もないような、陰惨いんさんな合唱コーラスと共に、一隊の男女が、妖魔の行列のように広間へ入って来ました。いずれも真黒な覆面、その間から、眼ばかり光らして、覆面越しの読経どきょうの声も、何んとなく陰に籠ります。

続いて燃え立つような真紅しんくの布を纏った四人の女が、一人の娘を伴って現われました。夢見るような足取りで、無抵抗に台の上に押し上げられたのを見ると、こればかりは町娘の服装をしたお静とらの囚われの姿だったのです。

「あッ、到頭」

あまりの事に平次は、もう少しで声を立てるところでした。人間の力でこの密室が押し破れるものだったら、どこかの羽目を踏ふみ砕くだいても飛出したであろうが、それとても出来ないことです。

又、一としきり奇怪な読経が湧き起って、魔像とお静あたりの四方を、黒装束の人間の輪が、クルクルと廻り始めました。

それから暫く続いて、広間は元の静寂に還ると、不意に、人間の輪はサツと散ります。見ると、台の上に立ったお静は何時の間にもやら、黒装束くろしょうぞくの人間達の手で、十七乙女の若々しい肌へ、ベタと金箔きんぱくを置かれてるところだったのです。お静は魂の抜けた人形のように、少し仰向き加減に突っ立った儘、なすが儘に任せて身動きもしません。

やがて乙女の上身に金箔を置き終ると、黒衣長身の長老とも見える男は、黒頭中の覆面を取ってお静の前に近づきました。

「あッ」

平次はもう一度声を立てるところでした。その男というのは、



地獄変相図から抜け出した、悪鬼のように恐ろしく映ったでしよう。

「――」

続いて覆面を除ったのは、この薬園の預主、峠宗寿軒です。半白の中老年人で、立居振舞になんとなく物々しいところがあります。二人は前後して進んで、金箔を置いた乙女の肩へ唇を触れました。続く黒装束の五、六人も、悉く覆面を外して、同じように乙女の身体へ唇の雨を降らせます。

この冒瀆的な行法が、どんなに平次を怒らせた事でしょう。お静の浄らかさを救う為に、どんな事をしても――とあせりました。が、この密室はどんな設計で出来たものか、二刻あまり探し抜いても、どうしても入った場所がわかりません。

その内に、下の広間が又賑かになりました。と見ると、焰のよ
うな赤い布を纏った、半裸体の四人の美女は、人面獸身の魔像と、
金箔を置いたお静を中心にして、あらゆる狂態を尽して乱舞を始
めたのです。

魔像の前の大香炉には、幾度も幾度も異香が投げ込まれました。
天井裏でそれを嗅ぐと、平次の心持も、うつらうつら夢見るよう
になります。

幾度か醒めては、広間の様子を覗き、幾度か気を喪つては何刻
となく深い眠りに陥ちました。——これではならぬと——満身の力
を両の拳にこめ、両眼を見開いて気を励ましましたが、泥酔した
人のように崩折れて、その努力も永くは続きません。

金色の処女——お静の上に加えられる、あらゆる辱かしめと、
怪奇至極の大儀式が、断片的に平次の眼と耳に焼き付けられなが
ら、そのまま遠い遠い過去の出来事のように、他愛もなく消えて
行きます。

六

明くれば十月九日、三代將軍徳川家光は近臣十二名を従え、
微行の姿で雑司が谷へ鷹狩に出かけました。十二人の内四人は將
軍と同じ装いをした近習連、四人は鷹匠、あとの四人は警衛の士
で、微行とは言いながら、この時代にしては恐ろしく手軽です。
尤もこれは家光自身の命令で、目障りになるような士卒は、間近
に置かれなかつたまでのこと、音羽から小日向、大塚へかけては、
何千とも知れぬ警護の士で、蟻の這い出る隙間もなく固めており

ます。

この日はことの外不狹だつたせいか、家光は恐ろしく不機嫌で、近習達とろくろく口も利きません。鷹狩が済むと、待ち構えていたように音羽へ下つて、大塚御薬園の高田御殿へお入りになります。

御薬園の門前に迎えたのは、峠宗寿軒、五十がらみの総髪で、元々本草家で武士ではありませんが、役目ですから、麻袴を着けて將軍を高田御殿へ案内します。

奥の一間、贅を尽した調度の中に納まると、近習達も遠慮をして、將軍を存分にくつろがせなければなりません。高麗縁の青畳の中、脇息に凭れて、眼をやると、鳥の子に百草の譜を書いた唐紙、唐木に百虫の譜を透し彫にした欄間、玉を刻んだ引手や釘隠しまで、この部屋には何となく、さり気ないうちに漂う一抹の怪奇さがあります。

この時、女の童に襖を引かせて、茶碗を目八分に捧げて入つて来たのは、峠宗寿軒の娘お小夜です。曙色に松竹梅を総縫した小袖、町風に髪を結い上げた風情は、長局風俗に飽々した家光の眼には、どんなに美しいものに映つたでしょう。年の頃は二十二三、少しふけておりますが、その代り町家にも武家にもない、滴るような美しさがあります。

恐るる色もなく、家光の前に進んで、近々と茶碗を進め、二三歩退つて、

「お薬湯を召し上がりませ」

わだかまりもなく言つて、俯向加減に莞爾します。こんな無礼な仕打は、日頃の家光には見ようつたつて見られません。大名が

廓くるわがよ通いに夢中になったように、將軍家光が雜司ガ谷の鷹狩に夢中になったのも無理のないことです。

「――」

家光は黙って茶碗を取り上げました。本草家峠宗寿軒せんの煎じた薬湯、別に何の薬と言うでもありませんが、神気を爽さわやかにして、邪氣じやまきを払う程度のもの、唇のところへ持って行くと、高価な薬の匂いがプーンとします。

七

天井裏に閉じ籠められた銭形の平次、幾刻――いや幾日眠らされたかわかりません。フト眼を覚すと、四方あたりはすっかり明るくなって、天井裏ながら埃ほこりの一つ一つも読めそうです。怪奇な舞踊を思い出して、嘔氣はきけを催もよおすような不愉快な心持になりましたが、お静あんびの安否あんびが心もとないので、もう一度ギヤーマンの穴から覗くと、広間は広々と取り片付けられて、白日の光が一杯にさし込み、忌わしい物など影もありません。

思い直して出口を探すと、今度はわけもなく見付かりました。壁は同じような檜の厚板で張り詰めてありますから、一箇所だけ手摺てずれがして、出入口ということは直ぐわかります。暫く押したり叩いたりして見ると、どうした弾はずみか、いきなりスーッと開きます。多分扉みなぎの下の踏み板に仕掛があったのでしよう。

一足漲みなぎるような白日の光りの中へ飛出しましたが、困ったことに、庭にも廊下にも、広間にも玄関おびただにも、夥おびただしい人間がたかっついて、天井裏から飛び出したままでは、大手を振って出て行くわ

けに行きません。

「あッ、いけねえ。今日は上様お鷹狩の日だ」

霞かすんだような平次の頭にも、これだけの記憶が蘇よみがえって来ました。今日までに毒矢の曲者を捉つかまえる筈だったのが、天井裏に閉じ籠められてすっかり予定が狂ってしまったのです。

「こいつはしまった」

平次は天井裏で地団駄じだんだを踏むばかりです。

それから又何刻か経ちました。御殿の中の空気は遽にわかに緊張して、
「上様うえさまのお着き」
という囁きが、隅々までも行ゆきわたります。

上様お着きと言うのは、お鷹野は無事だったという証拠にもなりませんから、天井裏の平次もそれを聞いてホッとします。

「間違いがあれば、この御殿内だ。よし、それならば、まだ望みがある」

暫く泥棒猫のように、天井から天井へ、梁はりから梁へと渡って歩いた平次、何時の間にやら、羽目からスルリと抜け出して、離れの廂ひさしの下に這い込んでしまいました。首を少し曲げると、一枚開け放った障子の中に、上段の高麗縁こうらいべりが見えて、豊かに坐った黒羽二重の膝も見えます。

「上様だッ」

平次はヒョイと首を引きました。と同時に小夜が捧げた薬湯の茶碗が見えます。

やがて家光は薬湯を手に取り上げた様子、それと同時に平次の眼には、もう一つ動くものが映うつります。それは障子の外に、物の隈くまのように踞くまった総髪の中老人、霰あられ小紋こもんの袴かみしもを着て、折目正し

く両手をついておりませんが、前夜怪奇な行法を修した、この薬園の預主、峠宗寿軒に違いありません。

家光が茶碗を取り上げて、唇まで持って行くと、宗寿軒の唇が歪んで、障子を射通すような瞳が、キラリと光ります。

「あッ、毒湯だッ」

捕物の名人、銭形平次には、外の人にはない第六感が働きます。前後の事情から考え合せて見ると、家光の手に持っている茶碗の中に、正面な薬湯が入っているわけはありません。

笹野の旦那がくれぐれも頼んだのは、これだッ。

平次はいきなり廂から飛び出そうとしましたが、高が岡っ引、將軍様の前へ飛び出せるわけもなく、大きい声を出そうにも、その辺の物々しいたたずまいを見ると、うっかり騒ぎを大きくして、相手に棄鉢に出られると、反って恐ろしい事になりそうです。それに毒湯と思うのは、平次の単なる疑いで、実は本当の薬湯を勧めていられるのかもわからないのです。

ハッと気が付いて腹巻を探ると、折悪しく鍋銭はありませんが、小粒が二つ三つと、それに柄にもなく小判が一枚あります。その頃の小判は大変な値打で、岡っ引などに取っては一と身代ですが、一昨日笹野新三郎から用意のために手渡された金、將軍様の命に關ろうと言う場合ですから、物惜みなどをしていいる時ではありません。

いきなり小判を右手の拇指と食指との間に立てて、小口を唾で濡らすと、銭形の平次得意の投げ銭、山吹色の小判は風をきって、五、六間先の家光の手にある茶碗の糸底に発矢と当ります。薬湯は飛散って、結構な座布団も畳も滅茶滅茶。

「――」
家光は動ずる風もなく、面おもてをあげて小判の飛んで来た方を屹ぎつと見やります。

「あッ」
驚いたのはお小夜、起ち上がると、いそいそと近寄つて、葉湯に濡れた家光の膝へ、身体と一緒に、総縫い松竹梅の小袖を、サツと掛けました。

八

「これ、何をする――」

あわてて居住いを直す家光の膝を追うように、お小夜は袖の上へ顔を伏せました。

次の瞬間には、

「贗にせもの者ものッ」

と弾はじき上げられたように起ち上がります。

「漸ようやく気が付いたか」

「エッ、口惜くやしい、お前は誰だえ」

飛び退く女の帯際を猿臂えんびを延ばしてむんずと掴にせんだ偽家光。

「与力笹野新三郎、上様の御座を拝借して、その方親娘おやこの企たくらみを見破りに参ったのだ。神妙にしろ」

と、高い声ではありませんが、ツイ調子に乗って名乗りを上げてしまいました。

これが非常に悪かった――と言うのは、障子の外で、深怨しんえんの眼を光らせていた峠宗寿軒、娘の声にハツと驚いたところへ、続け

て笹野新三郎の名乗りです。思わず立ち上がるのへ冠かぶせて障子の内から、

「父上ちちのうへッ、露見ろけん——早く、早く、地雷火じらいかッ」

と娘のお小夜が悲痛な声を絞ります。

「おッ、娘、さらばだぞッ」

ヒラリと縁側から飛降りると、廂ひさしの上から銭形平次が、パッと飛付くのと一緒でした。

「野郎やろうッ、何処へ失せやがる」

素より捕物の名人、寸毫すんごうの隙すきありませんが、困ったことに宗寿は思いの外の剛力で、それに平次は、まる二日物を食わない上、廂ひさしから飛降りる機はずみに足を挫くじいて、進退駈引自由になりません。

「エッ、面倒」

二人はそれでも負けおとず劣ねらず捻ねじ合いました。あまりに咄嗟とっさの出来事で、遠ざけられた近習達が、駆け付ける暇もなかったのです。

そのうちにお小夜の帯がバラリと解けました。錦の厚板あついたの一と抱かかえほどあるのが、笹野新三郎の手に残ると、お小夜は脱兎だつとの如く身を抜けて、

「父上、地雷火は私がッ」

「おお、娘頼いけにえむぞッ、あの犠牲いけにえも逃すなッ」

親娘は最後の言葉を交すと、総縫い松竹梅の小袖は、大鳥のようにサッと奥へ飛込みます。

犠牲と聞いて平次は驚きました。捨鉢になった宗寿軒父子が、地雷火で高田御殿を吹き飛ばすとなると、あの可哀そうなお静の命は一たまりもありません。金箔きんぱくを置いて一度は祭壇に載せた

処女の身体は、いずれあの広間の何処かに隠してあるに相違ないでしょう。

「笹野の旦那、此奴を頼みます」

「お、心得た」

その内に遠慮して遠退いていた近習達も、騒ぎを聞いて駆け付ける様子。平次は猛然として突っかかって来る宗寿軒を、一つかわして芝生の上に叩きのめすと、身を退いてサツとお小夜の後を追いました。挫いた足首は、焼金を当てるように痛みますが、今はそんな事を言っている場合ではありません。

勝手を知った大広間の中へ入ると、プーンと鼻を衝く煙硝の匂い、地雷火の口火は早くも点けられたのでしよう。

今更事の危急な勢いに、平次はゾツと総毛立ちましたが、お静を匿した場所はまるで見当が付きません。

「お前は銭形平次、もう駄目だよ。一緒に死ぬばかりだ」

何々と気違い染みた笑いを突走らせるのは、黒髪も衣紋も滅茶滅茶に乱した妖婦お小夜、金泥に荒海を描いた大衝立の前に立ちはだかって、艶やかに邪しな眼を輝かせます。

「やい、女、あの娘をどうした」

「知らない」

「いや、知っている筈だ、言えッ」

「言わない、——どうしても言わない。私達をこんな破目に陥し込んだのはお前だろう。——その代りお前の名前を謔言に言っているあの娘は、この御殿と一緒に木葉微塵に碎け散るよ。好い気味だ、——あれはお前の情人だろう。知らなくつてさ、——おお、もう口火は燃えきった。ホ、ホ、ホ、ホ」

「いや、俺はお静を助けて見せる」

「馬鹿なッ」

荒海の衝立、怒り狂う紺青の波頭を背にして、小袖の前を掻き乱したまま、必死の笑いに笑い狂う美女の物凄さ。物慣れた平次も、思わずタジタジと退りました。次第に激しくなる煙硝の匂いに、もう一度気を取り直して、毒蛇の眼の如きお小夜の瞳を、精魂こめて凝つと見詰めました。

「解るまい、もう最後だ。それッ」

「いや、解った」

何を考えたか平次は、猛然としてお小夜の身体に飛び付きました。細腕を取って引退け、荒海の衝立をサッと前へ引き倒すと、その背後にあるのは『御葉草』と書いた御用の唐櫃、力任せに蓋をハネると、中から燦として金色無垢の処女の姿が現われます。全身に金箔を置かれたお静は、半死半生の儘この中に入れられて、捨てるか殺されるかする最後の運命を待っていたのでした。

「あッ、それを助けては」

後ろから縫り付くお小夜を蹴返して、金色の処女を小脇に痛む足を引摺って外へ飛出す平次、——それと同時に、

轟然——天地も崩るるような物音。

天に冲する火焰の中に、高田御殿は微塵に崩れ落ちてしまいました。

九

これは後でわかった事ですが、峠宗寿軒の前身は、駿河大納言

忠長の臣で、本草学の心得があるのを幸い、京都に行つてその道の蘊奥を窮め、身分を隠して大塚御薬園を預るまでに出世したのです。

主君忠長自殺の後は、何とかして、家光に怨みを報じようと、高田御殿の中に祭壇を設けて、中世に流行つた悪魔を祭神とする呪法を行ったのでした。その祭に夥しい犠牲を要するところから、腹心の者に命じて、音羽九丁目に唐花屋という小間物屋を出させ、江戸中の美女を釣り寄せては、その内でも優れた美人を誘拐かして犠牲にし、連夜ひそかに悪魔の呪法を修して將軍家光を調伏する計画だったのでした。

それも埒が明かないと見て、近頃は毒矢を飛ばしたり、娘お小夜の美色を餌に、毒湯をすすめて一挙に怨を報じようとしましたが、奉行の朝倉石見守が老中に進言して、將軍家光に面差の似た与力笹野新三郎を替玉に使い、見事にその裏を掻いて取って押えたのでした。

峠宗寿軒は詮議中に自殺してしまいましたが、娘のお小夜はそれっきり何処へ行ったかわかりません。

大塚御薬園は、その後間もなく取潰しになり、天和元年護国寺建立の敷地として召上げられた事は人の知るところです。

銭形の平次はこれだけの仕事をして、將軍の命を狙う怨敵を平げましたが、笹野新三郎に約束したお鷹野以前に曲者を挙げるこゝとが出来なかつたのと、事件の性質が性質なので、表向きはその手柄に酬いられませんでした。併し、家光の胸に銭形平次の名が印象深く記憶された事と、金色の処女——お静の愛を確り掴んだことだけで、若い平次は満足しきつておりました。

(編注)

本作品の表題は底本にはルビはありませんが、誤読を避けるため初出時にならってルビをふりました。

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「文藝春秋オール讀物號」昭和六年四月号 文藝春秋社

24

底本―「錢形平次捕物全集」第一卷 河出書房 昭和三十一年五月五日初版

編集・発行 錢形倶楽部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>